

だが、紛争の負の遺産はそれだけではない。地雷という名の悪魔の兵器が、人々の体と心に深い傷を残した。手足を吹き飛ばされたり、飛び散った破片で失明したり。戦火が過ぎ去つ

た今なお、地中には22万個の地雷が潜んでいる。「悪魔のおもちゃ」地雷がここの呼ばれるのは、犠牲者の多くが子どもたちだからだ。小さく色や形も多種多様な地雷は、時に「おもちゃ」にも見える。好奇心旺盛な子どもたちは、知らずに踏むだけでなく、不用意にそれに触れてしまう。

このNGOの活動を影で支えてきたのがJICAだ。ペイン

クリニックが専門の前田倫医師（西宮市立中央病院麻酔科・ペインクリニック科部長）をJICA専門家として派遣し、HOPE87のスタッフに治療法などを指導してきた。また2008年からは、ペインクリニックの普及を目指す現地政府の計画を後押しするため、「地雷被災者等に対するペイン・マネジメント・プロジェクト」を開始。主要都市の総合病院にペインクリニックのサテライトユニットを設置し、勤務する医療関係者へ技術指導やカリキュラム作成を行っている。

※痛みを和らげるための治療。

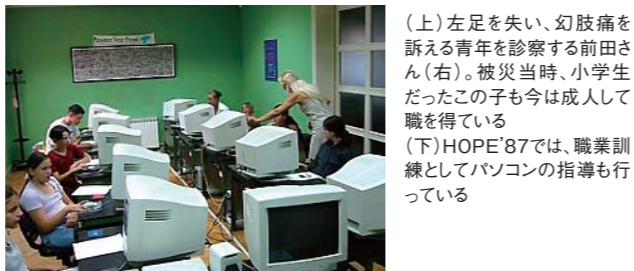
地雷

いまだに世界の78カ国に地雷が残されており、犠牲者の3分の1が子どもだ。命を取り留めても、治療やリハビリに必要な金銭的負担が貧困家庭にのしかかるばかりか、障がいを負った子どもたちは偏見や差別に苦しめられている。



幻肢痛との闘い

内戦により、いまだ22万個の地雷が地中に潜むボスニア・ヘルツェゴビナ。地雷によって失った手足が痛む「幻肢痛」が被災者を苦しめている。



(上)左足を失い、幻肢痛を訴える青年を診察する前田さん(右)。被災当時、小学生だったこの子も今は成人して職を得ている
(下)HOPE87では、職業訓練としてパソコンの指導も行っている

都市の総合病院にペインクリニックのサテライトユニットを設置し、勤務する医療関係者へ技術指導やカリキュラム作成を行っている。

ボスニア・ヘルツェゴビナ



少年兵

少年兵とは、18歳未満の男女による兵士のこと。その数は、全世界で推定約25万人。武装集団などに誘拐されていくケースによるものが最も多く、戦場では最も危険が及ぶ最前線に駆り出されたり、少女の場合には性的搾取の対象となることも多い。



もう一度、学ぶこと、生きることの喜びを

少年兵として戦うことを余儀なくされ、大きな心の傷を負ったシエラレオネの子どもたち。失った教育の機会を取り戻し、もう一度前に進もうと、地域住民が学校・教育環境の改善に立ち上がった。



(上)真新しい机で授業を受ける中学生。勉強ができることの喜びがあふれる
(下)学校が再開され、子どもたちにも笑顔が戻りつつある

内戦中は、多くの子どもたちが政府軍や反乱軍の一員として銃を手にした © AFP=時事

シエラレオネ



「少年兵」という悲劇
1991年に始まった内戦で7万5000人が犠牲となり、200万人以上が難民や国内避難民となったシエラレオネ。特に子どもたちは、その貴重な教育の機会を内戦によって奪われてしまった。5歳以上の多くの子どもたちが誘拐されて少年兵として従軍し、一時はその数が反政府軍の半数にも及んだといわれる。彼らには戦いへの恐怖感をなくすための麻薬が打たれ、少女たちはレイプの被害に遭った。2001年に停戦合意

「元少年兵を含む地域のすべての子どもたちに、学ぶこと、生きることの喜びをもう一度思い出してほしい」とそんな思いを現実のものとするため、JICAは05年より、内戦の被害が特に大きかったカンビア県で、崩壊した学校・教育環境の改善を支援する「カンビア県子供・青年支援調査を実施してきた。県内の小・中学校33校で、教員や保護者、地域の女性・青年グル

プの代表などで構成される「教育とコミュニティ開発委員会」を設立。研修やワークショップなどを通じ、委員会が自らの力で学校・教育環境の改善に取り組むための力を育てるとともに、各校のニーズに基づいたパイロット・プロジェクトを支援した。その結果、委員会と住民が一体となり、校舎の補修・建設や、教材、清潔なトイレ、学校菜園、通学路の整備などが進められ、今では魅力的に生まれ変わった学校に、子どもたちの元気な歓声が戻りつつある。09年11月からは、教育、基礎イ

ンフラの整備や生計向上活動など、住民を中心に包括的に地域開発に取り組む「カンビア県地域開発能力向上プロジェクト」も始まった。
JICA専門家の平林淳利さんは、「社会経済基盤の整備をより広い範囲で進めることで、子どもたちの活躍の可能性もさらに大きくなるでしょう」と展望を見据える。
内戦で経験した悲劇を乗り越え、前へ進み続ける子どもたち。彼らの未来への道筋を、地域住民がJICAとともに切り開こうとしている。